

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2025年6月29日号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第9回仙台国際音楽コンクール【開催日程】ヴァイオリン部門 2025.5.24 (土)～6.8 (日) ピアノ部門 2025.6.14 (土)～2025.6.29 (日)

第9回仙台国際音楽コンクール・ピアノ部門

ファイナル・セミファイナルレポート

音楽ジャーナリスト：須永 誠

ピアノ部門のファイナルは、6月26日から28日までの3日間、日立システムズホール仙台で行われた。セミファイナルを勝ち抜いた6人が、それぞれ2日間にわたって登場。協奏曲を2曲ずつ演奏した。共演は高関健指揮の仙台フィルハーモニー管弦楽団。

ファイナル出場者は国別では日本とロシア各2人、ドイツとクロアチア各1人。演奏曲目は、モーツァルトの協奏曲第20～22番、24～25番、27番の6曲から1曲と、ベートーヴェンからラフマニノフ、プロコフィエフ、矢代秋雄まで11人の作曲家の協奏曲計18曲から1曲を選択する。セミファイナルと合わせて3曲を演奏するのは仙台国際音楽コンクール最大の特長だ。

コンクールをサポートする市民ボランティアがピアノ部門出場者に行ったインタビューでは、協奏曲を演奏する機会が多いことを出場した理由に挙げた人が目立った。ユニークな特長は世界的な知名度上昇、出場者のレベル向上に直結している。

今回はこれまで以上にモーツァルトの比重が高まったことも注目度アップに一役買ったかもしれない。前回、第8回コンクールのセミファイナル課題曲はモーツァルト5曲とベートーヴェンの第1、第2番。1位から3位までの入賞者は全員ベートーヴェンを選んだ。

モーツァルトの曲は音が少なく、ごまかしが利かない。さらに音色や感情表現なども高い次元で求められる。演奏者の力量、音楽性やセンスが白日の下にさらされてしまう。一方で実際の演奏に接し、モーツァルトはその語法からそれなければ、表現の自由度が非常に高いことも感じた。今回は多くのコンテストがひるむことなく、自分の音楽を表現していたのが頼もしかった。モーツァルトは比類ない、自由な精神の持ち主だったとか。もし現代によみがえったら、アイデア豊かな演奏が増えたことを喜ぶかもしれない。

ピアノ部門の最終的な審査結果は6月28日夜、発表された。第1位はエリザヴェータ・ウクラインスカヤ(ロシア)、第2位はアレクサンドル・クリチコ(ロシア)、天野 薫(日本)が第3位に入った。4位はユリアン・ガスト(ドイツ)、5位は島多 璃音(日本)、6位はヤン・ニコヴィッチ(クロアチア)。

他にセミファイナル出場者が対象の審査委員奨励賞はペ・ジヌ(韓国)に決まった。同じく来場者の投票で選ばれた聴衆賞は1日目がウクラインスカヤ、2日目はクリチコ、3日目は天野。聴衆賞の3人がファイナルの1～3位を占める結果となった。

裏面に続く



1位のウクラインスカヤはチャイコフスキーの第1番とモーツァルトの第21番を演奏した。チャイコフスキーは構えの大きい、エネルギッシュな表現で聴衆を沸かせた。激しさや奔放さではなく、柔らかな響きと澄み切った音色で独自のチャイコフスキーを描いていく。この人の最大の魅力は叙情性としなやかさだろう。他のファイナリストと比べてテクニックが突出しているわけではない。部分的に前のめりになるところもあったが、第2楽章では美しい音色を生かし情感豊かに歌い上げた。弱音が美しく響いていたのも印象に残る。モーツァルトは歌心に富み生命感にあふれている。自作のカデンツァを演奏、持ち味？の低音の豊かな響きをうまく生かしていた。

2位のクリチコはラフマニノフの第3番とモーツァルトの第21番を選択。ラフマニノフはスケール感があり、豪放さと繊細さを併せ持つ。濃密なロマンも漂う。曲全体の構造を意識し、聴きどころをアピールするのも特徴だ。前半はやや抑制的だったが、第3楽章で気持ちを一気に解放。卓越した技巧を駆使し、圧倒的な表現力を示した。モーツァルトは透明感のある音で端正にまとめた。作為のない自然な流れと豊かな歌心がさわやかだ。ウクラインスカヤ同様、自作のカデンツァを演奏し、心意気を示した。

3位の天野は矢代秋雄の協奏曲とモーツァルトの第21番を弾いた。前回から課題曲となった矢代が演奏されたのは初めて。まだ11歳の天野がこの難曲に挑戦し、しっかりと自分の物にしていたことは聴衆を驚嘆させた。時に暴力的な力強さを求められるが、天野は体を浮かし、全身の力を指先に結集して鍵盤にたたきつける。非凡なリズム感覚、多彩な音色を駆使して、表情豊かに描き上げた。第2楽章のリズム・オスティナートの扱いは説得力があり、技巧のオンパレードである第3楽章も余裕をもって弾き切った。モーツァルトは明るく軽快、無理のない自然な流れに貫かれ、美しく歌っていた。一瞬憂愁を感じさせる部分もあって感心したが、持ち味の温かみのある音色はセミファイナルの第17番の方がより生きていたか。

4位のガストはラフマニノフの第3番とモーツァルトの第20番を選んだ。ラフマニノフは全体の構造をしっかりと捉え、この大作を徹頭徹尾明瞭に描き上げた。リズムは歯切れ良く、ピアノを豊かに鳴らす。スケールの大きな叙情表現も魅力があった。モーツァルトはこの曲特有の暗い情熱より、叙情的な表現が前面に出た印象。明確なリズムとアクセントによる表情付けが音楽に深さをもたらす。

5位の島多 璃音(日本)はリストの第1番とモーツァルトの第20番を演奏した。リストは冒頭から強靱な打鍵と独特な音色で聴衆を圧倒。多彩な音を次々と繰り出す音色感覚と切れ味鋭いリズムは、この人の大きな武器だろう。同時に作品のカギを握る叙情性も豊か。モーツァルトは多彩な音色を生かし、清冽にまとめた。和音の響かせ方をよく吟味し、強弱による表情付けも説得力があった。

6位のニコヴィッチはチャイコフスキーの第1番とモーツァルトの第20番。チャイコフスキーは力強くスケール感もあるが、豪放な中に繊細さが感じられる。どんな時も音が濁らないのに感心した。モーツァルトは力強い打鍵に加え、響きを徹底して練り上げた繊細な表現など、奥行きがある。何より感心したのは1音1音にきっちり魂を込めているように感じたことだ。自分の世界を確かに持っている。音楽にとことん誠実に向き合う姿勢にも感銘を受けた。

高関指揮の仙台フィルは、どんな状況でもコンテストに温かく寄り添っていたのが印象深い。演奏者に存分に力を発揮させたいとの楽団員の思いも感じられた。きめ細かなサポートの背景には第1回からホストオーケストラを務めてきた自負があるのだろう。

入賞者には仙台フィルやアマチュアオーケストラとの共演などの場が与えられ、仙台を訪れる機会が多い。若い演奏家の成長を見守れるのは、国際コンクールを持つ都市の特権と言えるだろうか。